

人生の分かれ道で、真に「運命」を分けるものは何か

田坂 それこそが、今回の対話における、大切な問いですね。

ただ、その問いに答えを見出したいならば、さらにもう一つ、次の問いを問うてみるべきでしょう。

人生の分かれ道で、真に「運命」を分けるものは、何か？

—— 真に「運命」を分けるもの……、それは、何でしょうか？

田坂 そのことを教えてくれる、ある象徴的なエピソードを紹介しましょう。

ある男性が、米国に出張中、自動車を運転していて酷い交通事故に巻き込まれ、大怪我を負い、運び込まれた病院で、左足を切断する結果になりました。

本人は、「一瞬の事故で、人生を棒に振ってしまった！」と悲嘆の底にありましたが、日本から駆けつけた奥さんは、病室に入るなり、何と言ったか。

その奥さんは、旦那さんを抱きしめ、こう言ったそうです。

「あなた！ 良かったわね！ 命は助かった！ 右足は残ったじゃない！」

これは実際にあった話ですが、この話は、我々に大切なことを教えてくれます。

何が起こったか

それが、我々の人生を分けるのではない

起こったことを、どう「解釈」するか

それが、我々の人生を分ける

すなわち、人生で起こったことを「解釈」する力、「解釈力」。

それが、我々の人生の分かれ道で、真に「運命」を分けるのですね。

——なるほど……、人生の「解釈力」ですか……。

このエピソードは、「コップに残った半分の水」の喩えに似ていますね。「もう半分しかない」と考えるか、「まだ半分ある」と考えるかですね？

田坂 たしかに、世の中で、そうした「コップの水」の喩えは、しばしば使われますが、このエピソードとは全く違うものです。

なぜなら、このエピソードは、文字通り、「命が懸っている場面」であり、「人生が懸っている場面」だからです。その「コップの水」の喩えとは「切実さ」が全く違うのです。

「コップの水」の場面は、人生が懸っている場面ではないため、安易に「もう半分しかない」と考えてしまうのが人情ですが、この「交通事故」の場面は、人生のぎりぎりの場面であるため、逆に、腹を定められるのですね。

安易な救いの無い場面だからこそ、腹を定められる、覚悟を定められる。

そして、腹を定め、覚悟を定めたとき、不思議なことに、我々の心の奥深くから、力が湧き上がってくるのですね。